

いろは文字鉤くさり（その三十一景と酒 万葉歌から）

河尻成泰 

いろはにほへと ちりぬるを
色は匂へど 散りぬるを
わかよたれそ つねならむ
我が世誰ぞ 常ならむ
うみのおくやま けふこえて
有為の奥山 今日越えて
あさきゆめみし ゑひもせず
浅き夢見じ 酔ひもせず
(ん)

(一) 伊勢路を漫ろそぞ 浪漫の波はろまん
遥遥海にはろばろ 入道の顔にふだう かほ

大海おほうみに 島もあらずに 海原うなほらの たゆたふ波に 立てる白雲しらくも
(卷七—一〇八九)

(二) 仄ほのか山の辺へ 辺へには川の門と 常吉野の地とこ 千代致景ありちよちけい
流河りうかしづ繁吹きぬ 濡ぬるる袖振る 累世るいせの景を 愛をしみ廻めぐる輪
吾わも賞美しのはむか かく夏身路なつみぢよ

山高み 白木綿花しらゆふはなに 落ち激たぎつ 瀧たぎの河内かふちは 見れど飽かぬかも
(笠朝臣金村 卷六—九〇九)

山高み 白木綿花しらゆふはなに 落ち激たぎつ 夏身なつみの川門かはと 見れど飽かぬかも
(式部大倭 卷九—一七三六)

(三) 夜昼数多 あまた

旅寝波揺れ

冷雨過ぐるぞ れいう

それ夷道果つ ひなぢは

強く權撥ね かいは

寢覚め明石な あかし

名に負ふ瀬浦 せうら

乱流あらむ らんりう

向かふ東方 とうほう

美し雲居 うろは

偉容大和の ゑよう

野島見ゆおお のしま

天離る あまざか

夷の長道ゆ ひな

恋ひ来れば

明石の門より あかし

大和島見ゆ

かきものあそみひとまろ
(柿本朝臣人麿 卷三―二五五)

(四) 奥いや深く

奇しき酒や くす

やよ坏に今 つぎ

真梅浮け まはな

今日も語らふ けふ

風雅人ここ ふうがびと

この梅に燃え

恵比須顔して えびすがほ

手にも花片ああ はな
奇に散るよさ あや

酒坏に さかづき

梅の花浮け

思ふどち 飲みての後は 散りぬともよし

おほともさかのうへのいらつめ
(大伴坂上郎女 卷八―一六五六)

(五) 咲く梅言ひき

奇異夢に見ゆ いめ

ゆららゆら梅

愛でよ我の身 め

風流びか我し みや

白き肌故 ゆゑ

恵酒に浮く日 ゑざけ

人梅香も うめがが

黙し句はせ もた

清香に酔はす せいか

梅の花

夢に語らく いめ

風流びたる みや

花と我思ふ あれも

酒に浮べこそ うか

(卷五―八五二)

(令和五年一月十一日)

(一) いつかの伊勢行幸に供奉した誰かの作。海が珍しい大和人の感動。

立てる白雲しらくも 行幸は冬か春という注釈もあり、あの時代に入道雲などという言葉があったはずはないが、勝手に入道雲とした。『日本国語大辞典』(小学館)によれば、「入道雲」という言葉の用例では高村光太郎の『道程』が一番古い。(付一)

(二) 風景の歌としては離宮のあった吉野宮滝あたりの歌は欠かせまい。

千代致景あり 致景はよい風景。

流河繁吹きぬ しぶきをあげて激しく流れる吉野川。

夏身の川門 門は狭くなっているところ。夏身は宮滝から吉野川の少し上流で今菜摘なつみという地区がある。

(三) 人麿の羈旅きりよの歌八首から。

それ夷道果つ 明石は畿内の西の端。ここより西は「天離る夷あまざか ひな」。今人麿はどこからの帰り

か、「天離る夷あまざか ひなの長道」と言っているからかなり遠くからだろう、ひよっとして太宰府

から? 直前には、明石あたりで家(大和)から西へ離れていく歌がある。(付二)

尚太宰府から平安京までは海路30日の行程だったそうだ(日本古典文学全集「萬葉

集①)。

名に負ふ瀬浦 有名な明石海峡の海。明石大門。

野島見ゆおお 野島は人麿がこの旅の歌二首で淡路島の野島を歌っているが、ここでは人麿の言う大和島(瀬戸内海から島のように見えた大和の陸地)を「野島」と呼ばせてもらった。

(四) ここから酒の歌。酒といえば大伴旅人の讃酒歌13首(巻三)だろうが、あそこの歌は以前二度ほど取り上げたので、今度は色合いの違った、ちょっとおとなしい、品のいい(?)歌を。思ふどち 仲間は仲間、連れ、どうし。

(五) 「愛めでよ我われの身」から終わりまで、詠み人の夢の中で梅が言った言葉。元歌は元号令和を

生んだ梅花の宴の時の歌三十二首に追和した歌。作者は旅人とも坂上郎女とも。

風流みやびから雅みやびやか。上品で優雅。

恵酒あせけに浮く日あせけ恵酒は佳酒、美酒。梅の花が、この歌人が楽しんでいる酒を美称で言った。

(付一)高村光太郎『道程』(一九一四年)「夏」

………

夏になればてらてらと 屋根の瓦が照り返し

入道雲も上のほせつつ うろん臭のほげなうす笑ひ

………

(付二)留火ともしびの明石大門あかしおほとに入る日にか漕こぎ別れなむ家のあたり見ず(巻三―二五四)

後記

前作からかなりの日数。また万葉だが何をテーマにしようか。あの歌、この歌、どうしよう。迷った
拳句、なんとか形にはなっただろうか。
(令和五年一月十四日)